「譚綴」

『日向ぼっこ』

九谷　六口

木崎忠は、居たたまれない気持ちで呑み会に参加していた。

バブル崩壊以前、金融関連企業は隆盛を誇っていた。そして、企業間や業界内の情報交換も兼ね、セミナー、研究会などが頻繁に行われていた。

呑み会のメンバー四人は、その時知り合った仲間だ。既に十数年も続けている。

だが、バブルの崩壊は凄まじく、金融業界の混乱は目を覆いたくなるほどのものだった。メンバーは、金融業界の再編などの波に巻き込まれ、皆、何回かの転職を経験している。

「で、俺の会社だけどさー……」

いつも口数の多い笹原敏夫が話し出した。笹原は、五十六歳。メンバーの中では一番年上だ。外資系証券会社に勤めていたが、経営状態は悪く、経営陣は人員削減にしか経費節減手段を見出せないでいた。仕事は増える一方。これでは身がもたない。その結果、止せばよいのに自己都合退職。微々たる退職金を見て苦笑したほどだった。辞めたのは二年前。一年間遊んだ後、今の会社に就職し、一年ちょっとが過ぎている。

「売上げが上がらなくてね。普通だったら閉鎖だよ。株主がまだやる気なんで頑張って仕事してるけどね。給料は、きちんと貰っている。でも、さすがに気が引けることがあるよ。難しいねインターネットを使った商売は……」

たまたまたまたま前の会社でマーケティング関連の仕事をしていたため、インターネットを媒体としたビジネスを進める会社に就職していた。

「うちは、まあまあなんですけど……。経営者が立てる目標値って、いつも右上がりのおおきな数字ばかり。これじゃー、幾ら遣っても達成率が付いていかないわっ。営業さんが大変」

メンバー唯一の女性、藤田美恵子が話を続けた。一番若い。損害保険会社の統計室に勤務している。

「最近思うの。男の人って、一日中何もせず、デスクに座っていられるのね。

Copyright © H.Mitani

私なんか絶対に出来ないわ。どう言うつもりなのかしら。朝来てＰＣの前に座って五時半まで何もしないの。時間になればただ帰るだけ。たまに仕事が来そうになると、人に廻しちゃうの。それが上手いの。要するに何もせず、ただ居るだけでお給料を貰っていることになるわ。女には出来ない」
「男だから、じゃないよ。女も同じだよ。人に依るんだよ」
　笹原も、さすがにそんな真似はできない。
「貧乏性の人間と、そうじゃない人間がいるんだよ。藤田さんは、貧乏性なんだよ。俺も、どっちかと言えば貧乏性だけど。でも、そうやって給料貰えるんだから悪くないんじゃない」
「私は、嫌！」

　藤田の元同僚だった、伊東一郎が口を開いた。
「うちはまた統合の話が出てるよ。落ち着かなくてね。貧乏閑なし。会社は続くと思うけど……。藤田さんは、相変わらず頑張っているの？」
「考えてみれば伊東さんと一緒に仕事してた時に比べれば、ヒッチャキになって仕事してないな」

「ところで木崎さんはどうなの」

　――　来た来た。
　笹原は、木崎と呼びつけにしたり、木崎君と呼んだりする。さんを付けた時は、大抵、茶化すときだ。木崎は、笹原に今の会社の状況を話したことがある。知っていながら聞いてきた。相変わらずの男だ。

「前の会社が無くなったから、その時の上司、同僚と三人で保険会社の代理店を始めたんだ。ちょっと変わった商品を扱っている」
「日本の会社なの」
　藤田が訊いた。
「いや、外資系だ。本社は、アメリカにある」
「日本での実績はあるの。それに変わった商品て、どんな商品なんですか」

Copyright © H.Mitani

伊東は、いつも突っ込んでくる。
「まだ、始めたばかりだし……。日本ではこれからなんだ。９・１１事件以降に作られた商品で、個人保険と団体保険のメリットを融合した、ユニークな企業向けの商品。しかも、大手企業向け。それだけ、営業が難しい。商品の詳細を話すと長くなるし……。三人の会社だけど、きちんとホームページもたててるから、それを見てよ」
「アメリカでは実績あるの」
伊東が、突っ込む。
「いや、まだ数件しかない。全社的にこれからなんだよ。これから」
「ところでお給料は」
藤田が聞いた。笹原は事情を知っているが、今日は珍しく黙っている。
「営業に関する費用や事務所の家賃は、本社が持つけど、人件費までは持てないって事で……　要するに契約が取れるまでは、給料はなしっ」
「じゃー、無給なんだっ！」
笹原以外が驚いたように口を揃えて言った。
「そー、無給」
「ま、皆、大変なんだよな」
笹原が、場を取り仕切るように言った。

――　皆、気楽だよ。何が大変なものか。売上げがないくせに給料を貰ったり、座っているだけで給料を貰ったり。三人ともノンビリしたもんだよ。こっちは汗水流して四苦八苦で働いているのに。それなのに、給料はなし。何処か間違っている。何処かが……。
真面目な木崎は、真剣に悩みだしていた。

「おはようございます」

木崎は、オフィスのドアを開け中に入った。ボロボロのビルの五階。部屋は広い。不景気真っ最中のこの時期、結構安い家賃で広い部屋を借りること

Copyright © H.Mitani

ができる。
　広いオフィスの片隅にデスクが三つ。社長の新井彰と技術者の若宮誠、そして木崎のデスクだ。調度品はデスク三つと本棚が一つしかない。部屋の広さが寒々しさを誘う。

「木崎君、今日は、ＫＢＡに行く予定だったね。この会社の契約は大口だ。絶対に落とさなければ駄目だよ」
「木崎さん、頑張ってください。我々の会社の将来は、ＫＢＡにかかっています。つまり、今日の木崎さんの頑張りに次第です。死に物狂いでやってください。お願いします」
「まあまあ若宮君。そう木崎さんにプレッシャーを掛けるものではないよ。木崎さんにだって良く判っていることなんだから。ねー、木崎さん」
「社長、そうかも知れませんが、まだ、一件も契約を獲得できてないんですよ。営業担当取締役の木崎さんの役目です。もう半年も経つのに……。お二人には、貯金があるかも知れませんが、私はもう限界です。そろそろ給料を貰わないと遣っていけませんよっ！」

――　何言ってるんだ、ふざけるんじゃない。こっちだってそうそう貯金がある訳じゃない。苦しいのは同じだ。そんなに言うんだったら自分でも営業してみたらいいんだ。二人とも営業の大変さも知らないくせに。デスクに座って、あーだこーだ言って……
「ま、木崎さん。そんなふて腐れた顔をしないで……。そんな顔でＫＢＡさんに行ったら、事は上手く運ばないよ」
――　この顔は生まれ付きのものだ。余計なお世話だ。
「とにかく……　今からＫＢＡさんに行ってきます」
　木崎は、階段を小走りで駆け下りた。エレベーターなどはない。一日に何回か上り下りをするが、さすがに疲れる。

　初夏の太陽がコンクリートの地面を熱くしている。照り返しも凄い。

Copyright © H.Mitani

ＫＢＡ株式会社はオフィスから五駅目。歩きを入れても三十分位しか掛からない。意を決してＫＢＡのビルに入った。

今、木崎は会社の近くにある公園のベンチに座っている。昼飯時間。手には牛乳瓶とアンパン。脇にはカバンを置いている。

――　ニコニコ笑って聞いていたくせに、では、また、の一言だ。また駄目か。もう何件断わられたんだろう。あの商品は、確かに被保険者を考えたすぐれた保険商品だ。何故、良さが判らないのだろう。私以外に説明できる者はいない。新井だって若宮にだって出来ない。その私が説明しても理解してもらえない。契約獲得は無理なのか……。アーあ！

何時しか木崎はベンチで眠ってしまった。

ふと気が付くと陽は西に傾いている。

――　いけない、会社に戻らなくては……

木崎は急に立ち上がった。脇に置いたカバンを掴み、会社に向け駆け出した。

――　また、二人がトヤカク言うだろうな。余り五月蝿い事を言うようだったら、こっちにも覚悟がある。冗談じゃない。

五階まで駆け上がる。

「遅くなりました……？」

ドアを開けてビックリしてしまった。もう一度、ドアの会社名を確かめた。確かに自分の会社だ。

新井が気付いた。

「今まで何処に行ってたんだっ！。こっちに来たまえっ！」

Copyright © H.Mitani

オフィスには、二十人程の人間が居る。あの心寂しい雰囲気などはない。皆、活き活きとデスクに向かい、カシャカシャとキーボードを叩いている。隅では、何人かが打ち合わせをしている。

若宮は、偉そうに新井の斜め前に大きなデスクを構え、ふんぞり返っている。社員は、木崎に目もくれない。

新井が木崎に気付いた。

「木崎君！　こっちに来たまえっ！」

今まで木崎さんだったはずだが木崎君と呼ぶ。木崎は、オズオズと新井の前に行った。

「ここでは何だ、あの隅のソファーに行こう」

心なしか新井の姿勢が良くなっている。

どうなっているんだろう。たった数時間しか経っていないのに……。木崎は、狐につままれたような感じになっていた。

「さー、座りたまえ。さて話を聞こうか。この三ヶ月、連絡もなしに、何処に行っていたのかね」

――　三ヶ月？

「長期無断欠勤だ。会社としては、懲戒免職にすることもできる。しかし、互いに頑張ってきたのだし、そこまでするつもりはない。君が来なくなって三、四日後だったか、奥さんに連絡したよ。奥さんは、あー、そうですか、家にも帰っていませんがと言っただけだ。別に心配している様子もなかった。捜索願いでも、と言ったら、あーら、お出しになるんでしたら、そちらでどうぞ、と言ってたよ。どうなっているのかね、君の家は。いや、そんな事はどうでも良い。何処で何をしていたのかね。しかも真っ黒に日焼けして……。まさか、ベンチで日向ぼっこばかりしていた訳ではないだろうね」

木崎は訳が判らなかったが、とにかく話のつじつまを合わせようと思った。

「いやー、済みません。ＫＢＡさんの帰りに、他の会社もと思いちょっと遠方に出かけてみたんです」

「遠方？　まー、良い。君が、ＫＢＡさんを出た後だったと思うが、先方さ

Copyright © H.Mitani

んから君が戻ったら、すぐ来てくれと連絡が入ったんだよ。それなのに君は、待てど暮らせど戻ってこない。仕方なく、木崎は急病で入院した。替わりに私が行くと知らせたよ。翌日、若宮と一緒に行ったら、契約の話だ。木崎さんの説明は、実に良かった。是非とも会社として契約したいとの事だった。その場で契約成立だ。先方さんは、木崎さんが退院されたら是非、もう一度、お会いたいと言っている。病気上がりが、そんな日焼けした顔じゃー困るが……。ま、近々、顔を出すように。君の行動には問題が多いが、このように会社が儲かるようになったのも元はと言えば君の努力だ。無断欠勤だから、三ヶ月分の給料は払えない。しかし、ＫＢＡさんのお陰でかなりの契約金が入った。君も株主の一人だ。株の配当がある。ちょっと待て」

新井は、自分のデスクの横にある金庫を開けた。中から分厚い封筒を出した。

「さっ！　これが明細書だ。こっちが君への配当。二百万ある。ところで奥さんには会ったのかね？　まー、良いか。今は、私も忙しい。他人の家庭の事情までとやかく言う閑はない。今日は帰って良いが、明日から、きちんと出社するように。あれが君のデスクだ」

新井の斜め前に、若宮と同じようなデスクがある。

「済みませんでした。明日からは、ちゃんと出社しますので。では、これは頂いておきます」

若宮の方に目をやると偉そうな態度で、ウィンクなどをしている。虫の好かない男だ。

家に帰るのは止めた。妻が何を言い出すか判らない。

あの公園に行き、あのベンチに座った。木崎は、懸命に考えたが状況を把握できなかった。

胸に手をやると分厚い札束の感触がある。明細書と封筒だ。やはり嬉しい。自然とニコニコした表情になってしまう。

気が付くと朝になっていた。一晩、ベンチに座っていたのだ。胸に手をや

Copyright © H.Mitani

ると分厚い感触。時計を見ると出社時間の五分前。
木崎は、急に立ち上がり駆け出した。まだ、間に合う。
儲かっているんなら、エレベーターのあるビルに替われば良いのに、などと考えながら階段を五階まで駆け上がる。
オフィスのドアを開けた。

「アレッ！」
部屋には何もなかった。ただ、汚れた床があるだけ。ドアを見る。会社の看板もない。
「変だなー。フロアーを間違えたのかな……」
ガタンと音がしたので、振り向くと向かいのオフィスのドアが開き、事務員らしき女性が出てきた。
「ちょっと済みません。ここは五階ですよね」
「えー、五階ですけど……」
「この会社は、どうしたんでしょう。ご存知ですか」
「あら、私がここに来たのは、二ヶ月前ですけど、その時からこの部屋は、空き部屋と聞いていますよ」
その女性は怪訝そうな顔をして廊下を歩いていった。
――二ヶ月前から空き部屋……？

トボトボと階段を下り、あの公園のあのベンチに。胸に手を遣る。

――無いっ！
分厚い感触が無い。胸ポケットに手を入れると明細書はある。いけない、階段で落としたのかっ！　木崎は、急に立ち上がり厳しい顔で駆け出す。
あったあった。ドアの前に落ちていた。封筒を胸ポケットに入れる。
ニコニコと笑いながら、あの公園のあのベンチに座り、胸に手を遣る。

――無いっ！
分厚い感触が無い。胸ポケットに手を入れると明細書はあった。

Copyright © H.Mitani

木崎は、急に立ち上がり厳しい顔で駆け出す。

……

某公園のベンチに、真っ黒に日焼けし、伸び放題の髪の毛、テカテカになった背広、ネクタイ姿のホームレスが居る。手には、ボロボロのカバンを持っている。

彼は、ニコニコ座っていたかと思うと胸に手を遣り、急に厳しい顔になり駆け出す。少し経つとニコニコ顔でベンチに戻り、座る。

また、胸に手を遣り、急に駆け出す……

毎日毎日、彼は、この動作を繰り返している。

（了）

Copyright © H.Mitani

譚綴

「日向ぼっこ」

二〇〇二年五月二十九日

編集・発行者　エムツー・プラデオ

三谷　弘

禁無断転載・複写

Copyright© H.Mitani

Copyright © H.Mitani